最高学部

この１年を振り返って

最高学部部長　高橋和也

2025 年度、最高学部では、これまで自由学園高等部修了生を中心としてきた学びの場に、初めて自由学園外の高等学校から 2 名の学生を迎えた。最高学部は 1949 年の創設以来、自由学園高等部を修了した学生を受け入れてきたが、2025 年度入学生から外部の高等学校卒業生にも門戸を開いた。これは、創立 100 周年を機に自由学園全体で進めている「共生共学・共生共創の学校づくり」の一環でもある。外部から来た学生にとっては、その日常そのものが新しい学びとなった。一方、これまで自由学園で学んできた学生にとっても、新しい背景を持つ仲間と学ぶことによって、自分たちが当たり前と思ってきたことを見つめ直す機会となった。また、2025 年度からは「共生共創プログラム」が本格的に始まった。学部の「内側」に新しい人を迎えると同時に、学部の「外側」に学びの場を大きく広げた一年であった。

1 学期の様子

4 月 9 日、始業式。外部からの新入生 2 名を含む新しい仲間 20 名を加えて、2025 年度は 72 名で始まった。始業式に先立ち、新 1 年生は高尾わくわくビレッジでの 2 泊 3 日の修養会を行い、親睦を深めた。また 4 月 24 日には、最高学部学生寮のしののめ寮・光風寮合同の新入生歓迎会が行われた。学部 1 年生 8 名と 4 月から学園に滞在している英語 TA2 名が参加した。

2025 年度を通じても自主研究「RO 農法への挑戦」の取り組みは積極的に展開された。4 月 19 日、20 日には、第 1 回目の活動が那須農場で行われた。最高学部 4 年生 3 名、2 年生 1 名、1 年生 3 名、教員 2 名の計 9 名が参加し、ジャガイモの植え付けなどに取り組んだ。

5 月 1 日、最高学部の新しい紹介冊子「自由学園最高学部 2026～本当の自分と出会うための学び～」を WEB 公開した。

2025 年度、共生共創プログラムも本格的に動き始めた。このプログラムは、社会の現場で先駆的な取り組みを行う実践者と学生をつなぎ、実社会において問題発見・問題解決の力を磨くことを目指すものである。6 月 4 日、第 4 回共生共創フォーラム「社会的投資でひとりひとりが輝く世界を」を開催した。NPO 法人 ARUN Seed 代表理事の功能聡子さんを講師にお迎えし、社会的投資を通して社会課題の解決を目指す活動について学んだ。最高学部生に加えてオンラインから 22 名の参加があった。

共生共創プログラムの学外での実践も始まった。卒業研究とのつながりで 4 年生による実践が多く、梅崎花子さんが「水俣病センター相思社」で、丸原歩さんが、北海道の「共働学舎」や「大地×暮らし研究所（メノビレッジ長沼）」で、伊藤碧菜さんが石川県能美市の CNC（コミュニティナースカンパニー）で、それぞれ活動した。社会の現場で経験したことを、自分自身の問いへと持ち帰り、再び学問的に考えていく。その往復が、最高学部における実践型リベラルアーツの一つの姿となった。

6 月には学外での環境活動への参加も進められた。東久留米市役所で行われた第 29 回環境フェスティバルではポスター作製を 2 年生の鈴木あかりさんが担当。生活経営研究実習の「草本灌木」グループがその取り組みを紹介するブースを出した。また全国水環境マップ実行委員会による「身近な水環境の全国一斉調査」にも参加した。自由学園では 2004 年の第 1 回以来、毎年継続して参加している。継続的な観測は、時間を積み重ねることで環境の変化を捉える学びとなっている。

6 月 21 日、最高学部の学部祭を開催した。最高学部棟を舞台に、各学年がそれぞれ工夫した企画を行った。相談コーナーやカフェ、生活経営研究実習や領域横断研究・経営実践研究を紹介する企画など、学部の学びを来場者に伝える内容となった。特に 4 年生が企画した「最高学部人生ゲーム」は、最高学部への入学から始まり、講義を選択し、学生生活を送り、卒業へと進んでいく内容であった。講義カードを釣り上げて履修科目を決めるなど、最高学部での学びそのものを遊びにした企画で、学生自身が自分た

ちの学びを振り返り、他者に伝える機会となった。

夏休みの 7 月 25 日から 8 月 5 日まで、ネパールワークキャンプが行われた。1990 年から続いてきた活動は、2025 年度からアジア協会との連携による新しい体制で再スタートし、これまで培ってきた現地とのつながりを受け継ぎながら、ネパールのナショナルカレッジ（NC）の大学生と共に活動した。シンドゥパルチョーク郡では 200 本を超えるコーヒーの苗を植える植林活動のほか、地域の学校での授業、村の生活や災害についてのインタビュー調査などに取り組み、植林だけでなく、人々との対話や交流を通して地域を知る学びの機会となった。

2 学期の様子

9 月 17 日、2 学期始業式を行った。これに先立ち行われた帰寮式には、2 学期から入寮する海外からの体操・英語 TA も参加し、学生たちは英語で自己紹介を行うなど、早速交流を始めた。

9 月 22 日からは体操会に向けた練習が始まった。デンマークのオレロップ体育アカデミーから体操 TA を迎え、毎日 1 限を体操の時間として練習した。10 月 4 日には大芝生で全員体操の練習を行った。外部高校からの入学生、伊藤さん、長谷さんにとっても、共に身体を動かし、演技をつくり上げる体操会は、自由学園での生活を知る貴重な体験となった。

10 月 1 日、第 5 回共生共創フォーラム「地球環境を守る技術を求めて」を開催した。株式会社フィールドプロ代表取締役の三上正洋さん、株式会社 UPDATER SX コンサル＆イノベーション本部の沖山敬さんを講師にお迎えした。環境問題をめぐる社会の変化と、それに対して技術や事業を通してどのように働きかけるのかを学んだ。

10 月 14 日には、ネパールからのお客様を迎えた。この夏のネパールワークキャンプに参加した最高学部生・高等部生 7 名が現地で共に活動した大学生など、計 9 名が来校した。ネパールでの活動が、人と人との関係を育てる機会として学内に共有されたことは嬉しいことであった。

11 月 23 日の JIYU1123 では、3 年生が「自由学園のお茶の会」を再現するなど、学部の学びを伝えた。

12 月 6 日、7 日には、静岡県立農林環境専門職大学で開催された日本有機農業学会第 26 回大会で、最高学部 4 年山田周太郎さんと 1 年白石晴奈さんが「不耕起栽培におけるジャガイモ栽培手法の検討」と題してポスター発表を行った。これまでの実践を研究としてまとめ、学外の研究者や実践者に発表する機会となった。

12 月 23 日、2 学期終業式。午後には、1・2・4 年生の学生 7 名と教員 1 名が、学園内の竹、松、ナンテンを使って正門に門松を設置した。学生が学園の自然を手入れし、その恵みを暮らしの中に生かす活動となった。

3 学期の様子

2 月 18 日、第 6 回共生共創フォーラム「公害を語り継ぐ～対立を超え未来を創る～」を開催した。水俣病公式確認から 70 年という節目に、公害の歴史と、それをどのように語り継ぎ、対立を越えて未来につなげていくのかを考えた。

2 月 20 日、第 2 回 Jiyugakuen English Cup を開催した。学生たちが英語で自分の考えを発表し、高等部生や教員も発表を聞いた。英語を「学ぶ」だけではなく、英語を使って自分の考えを他者に伝える経験となった。

2 月 25 日、2025 年度卒業勉強・卒業研究報告会を開催した。卒業研究のテーマは、社会や地域の課題、文化や生活、環境、情報など多岐にわたり、それぞれが自分の問いと研究の成果を発表した。3 月、4 年課程 4 年生、2 年課程 2 年生がそれぞれ最高学部での学びを終えた。

2025 年度は、初めて外部の高等学校からの 2 名を迎えたことで、これまで私たちが当たり前としてきた学部の生活や学びを、あらためて見つめることができた。仲間と食事をすること、掃除をすること、礼拝で言葉を聞くこと、自然の中で作業すること、地域に出ること、海外の人と交流すること、研究をすること。そして、そこで感じたことを仲間と語り合うこと。その一つひとつが、自分はどのように生きたいのかを考えることにつながっている。最高学部がこれまで大切にしてきたこの学びを、より多様な人々と共有し、社会とのつながりの中でさらに深めていく一年となった。